BOOK X — 見えざる戦争

第03章 — 名もなき追跡者

01 — 二人の到着

最初の機密指定人員が地域施設に到着したのは、六時二十分だった。外では雨が降っていた。車両の運転手には目的地と、使用すべき入口の番号が伝えられていた。だが、乗客の名前は知らされていなかった。

一人の女が、折り畳んだコートを手に車から降りた。兵士が運転手の差し出した書類を確認する間、彼女は待っていた。兵士が彼女に身分証の提示を求めると、運転手はその確認を省略することを認める二枚目の書類を取り出した。

女は、兵士が到着時刻を記入するのを見ていた。

「それだけでいいのですか？」

兵士はもう一度、二枚目の書類に目を通した。それでいいと答えた。

デレン大尉は、北部の各区域に配置される人員への説明のために確保された部屋で彼女を待っていた。女の承認書の写しは、彼女より先に届いていた。彼女はM-06と呼ばれること、作戦の範囲内であれば将校の同行なしに投入できることを、彼は知っていた。

彼は席を勧めた。彼女はコートを椅子の背に掛け、立ったままでいた。

「対象について説明は受けたか？」

「病院での遭遇については」

「医学的評価は見たか？」

「抜粋を読みました」

彼は前夜にイマニ医師が送ってきた所見を手渡した。対象の最大筋力についての推定は記されていない。身体への負荷と、強制的に動かされることによって生じる結果についての警告が記されていた。

彼女は何も言わずに読んだ。

「これより新しい評価はありますか？」

「私の知る限りではない」

「では、これを使います」

デレンは、その所見の重要性を理解させるのに多少の時間がかかると思っていた。ところが、実際には、彼女が別のところで受けた指示が自分の指示に優先する可能性について説明することになった。

彼女は所見を折り畳み、コートのそばに置いた。

二人が話している間に、二台目の車両が到着した。乗っていたのは、ごく普通のスーツと、この天候には不向きな靴を履いた男だった。男は別室へ案内された。そこでは統合参謀部の将校が待っていた。デレンにはその説明に同席することが許されなかった。

四十分後、説明が終了したという通知が届いた。二人目の到着者の識別番号はM-08だった。配置予定の区域については、何も記されていなかった。

デレンは人員の移動を担当する将校に電話をかけ、新たに到着した二人を朝の命令配布の対象に含めるべきか尋ねた。将校は、彼らを派遣した部門がすでに必要な指示を出しているはずだと答えた。

「彼らがどこにいるか、どうやって知ればいい？」

「照会を出すことはできます」

「呼び戻す必要が生じた場合は？」

将校が別の誰かに確認する間、しばらく間があった。やがてデレンは、機密指定人員の帰還を求める場合は、その投入を承認した機関に要請すべきだと告げられた。

彼は答えを書き留めた。最初の女はまだ建物の中にいた。二十メートルも歩けば、どこへ行くつもりか直接尋ねられた。しかし、今説明された仕組みでは、その会話は命令とは見なされない。

机の上には二人の到着通知と並んで、作戦中に彼が安全に責任を負う人員の名簿があった。

新たに到着した二人のどちらも、そこには載っていなかった。

02 — 窓辺の時計

ロイは、店の正面の扉で鍵を回す音に目を覚ました。三時間余り眠っていた。一瞬、自分がどこにいるのか思い出せなかった。見知らぬ天井は、自分がどうしてそこにいたのか誰にも説明してもらえなかった、かつて目覚めた幾つもの部屋を思い起こさせた。

やがて店主が床の上で何かを動かす音が聞こえ、前夜の記憶が戻ってきた。

ベッドの端に腰掛けた。その動作で肩の奥に痛みが走り、次いで手にずっと小さな違和感が生じた。それが消えるのを待った。消えなかった。

棚の上では携帯電話の充電が終わっていた。レイチェルからのメッセージはまだなかった。

電話をポケットに入れ、店に出た。店主は窓辺に三つの時計を並べていた。すでに茶を淹れていた。

「もう少し眠っているかと思ったよ」

ロイは差し出されたカップを受け取った。店が忙しくなる前に出なければならないと、夜のうちに決めていた。もう一度座って休まなければならなくなるまでに、街をどれほど横断できるか考えていた。

店主はどこへ行くつもりか尋ねた。

「人を捜さなくてはならない」

「彼女は君がここにいることを知っているのかい？」

ロイは店主を見た。捜している人物について、何も話してはいなかった。

「毛布を持っていったとき、電話を見ていただろう」店主は説明した。「以前、この店にもあんなふうに電話を眺める若者がいたんだ」

ロイは思わず微笑んだ。彼女は自分の居場所を知らないと答えた。

店主は引き出しから小さな紙袋を取り出した。パンと、前日から残っていたリンゴが一つ入っていた。ロイは金を払おうとしたが、男は受け取らなかった。

「戻ってくるときは、修理が必要なものを何か持ってきてくれ」

外では、市の車両が交差点に停まった。二人の職員が向かい側の歩道に面した店を訪ね始めるまで、二人とも特に気に留めなかった。

店主は窓辺に行った。一人の職員は店舗名の表示された端末を持ち、もう一人が質問していた。

「昨日掲示された指示のことだな」

ロイはカップを置いた。

男は彼の方を向いた。「君を捜しに人が来るかもしれないと言っていたのは、あれのことかい？」

「そうかもしれない」

店主は関係する人々について説明を求めなかった。ロイが店に留まっていると危険になるようなことをしたのか、と尋ねた。

病院でのことを話すこともできた。ハヴェルが死んだ瞬間のことを語ることもできた。しかし、どちらの出来事も、短く説明したところで、一晩部屋を提供したことで当局から何をされるかを男が判断できるものではなかった。

「店を閉鎖されるかもしれない」ロイは言った。「ほかに何をされるかは分からない」

店主はもうしばらく窓辺に立っていた。毎朝この扉を開けることで、ほかの人々に対する責任を果たせるようにすることに、人生の多くを費やしてきたのだ。

「それなら、ここで彼らとその話をするのは避けた方がいいな」

ロイは部屋を貸してくれたことに礼を言った。それ以上の言葉を伝えたかったが、男はすでに食べ物の入った袋を彼に渡していた。

歩道に出ると、ロイは窓のそばで立ち止まった。窓辺の三つの時計は動いていた。一つだけ、ほかの二つより数分遅れていた。

店主は彼が写真の男なのかと尋ねなかった。ロイは一晩泊めてくれたことに感謝していた。しかしそれ以上に、男が代わりに尋ねてくれた問いに感謝していた。

03 — 識別番号

地域施設では、M-04がその朝到着した人員の一人との面会を求められた。負傷した男の新たな画像を見せられると思っていた。部屋に入ると、テーブルに座った一人の女がいるだけだった。彼女の前には交通ターミナルでの彼の報告書の写しがあった。

彼女は識別番号を名乗った。彼はその番号を耳にしたことがあったが、それを与えられた人物を見たことはなかった。

「市外に配属されていると思っていた」彼は言った。

「そうだった」

彼女は向かいの椅子を示した。彼は座った。

「病院であなたが何を観察したか、明らかにするよう求められたの。映像記録と評価書は持っている。でも、説明のつかない違いがある」

彼はどの違いのことか尋ねた。

彼女は、ロイとの遭遇中に彼の動作が中断されたことを記した箇所を開いた。評価書では、その中断は対象の例外的な加速によるものとされていた。映像記録では、対象はほとんど動いていないように見えた。

M-04はその瞬間を覚えていた。自分の動作は、それに対抗する力とぶつかるまで続くはずだった。ところが実際には、その力を発揮できる位置そのものが変わっていた。

「遭遇している間ずっと、あの男の方が速く動いていたわけじゃない」彼は言った。「こちらがすでに始めた動作を変更できないときに、動いたんだ」

「意図的に？」

「そう思う」

彼女は書き留めた。彼は、最初の遭遇時の映像の方が、その後の作戦中に撮られた映像より鮮明だと伝えた。さらに、どちらの映像も対象の最大能力を示すものとして扱うべきではないと言った。

「負傷していたから？」

「あの男が止めたからだ」

M-06は顔を上げた。

M-04は、ロイが優位に立ったあと、そのまま攻撃を続ける機会があったことを説明した。対象が機会に気づかなかったのか、気づいたうえで使わなかったのかを区別せよという指示は、どこにもなかった。だが彼は、その違いが重要だと思うようになっていた。

「理由を言った？」彼女は尋ねた。

「いや」

二人は残りの箇所を黙って検討した。最後まで目を通すと、彼女はファイルを閉じ、ターミナルの男について尋ねた。

彼は、その男はロイではなかったと答えた。身元認証の不一致と、それを確かめる際に自分が果たした役割を説明した。

「その人を解放する権限はあったの？」

「中尉にはあった」

「中尉がそこにいなかったら？」

M-04にはどうなっていたか分からなかった。自分の観察したことを報告することはできただろう。その情報をどう扱うかは、別の人間が決めることだった。

M-06はターミナルの報告書をほかの書類の上に重ねた。現在の自分の承認では、中尉の立会いは必要ないと話した。

「それは、人を解放する権限があるという意味か？」彼は尋ねた。

「今朝、その質問をしたわ」

「答えは？」

「個人の民事上の地位を決定する権限は私にはない、と」

それが彼女の尋ねた問いへの答えになっていないことを、彼は理解した。

部屋の外では通信担当職員が一時貸与の装備を割り当てていた。二人の一般兵士が無線機の製造番号と用紙の番号を照合していた。無線機を受け取る前に、二人は自分の名前を署名した。

M-04は署名を求められることもなく無線機を渡された。その前にM-06も同じ種類の装備を受け取っていたことに気づいた。二人とも、何かを貸与された個人として記録されてはいなかった。

その違いには慣れていた。誤った識別情報を根拠に一人の普通の男が連行されるのを防ごうとして一午後を費やすまでは、その違いに説明が必要だと感じたことはなかった。

04 — 二つ目の写し

セラ・ミンが事務所に着いたのは九時少し前だった。専門職登録局に求めていた回答は届いていなかった。代わりに照会がある部門に付託されたとの通知が届いていたが、その部門の住所は記載されていなかった。

協会の法務委員会の委員長から自宅に電話があった。協会が国家の作戦を妨害していると見なされれば、一部の病院記録へのアクセスを失う可能性があることを懸念していた。話し合うまで、これ以上書類を受け取らないようミンに求めていた。

彼女は、委員長に相談せずに既存の取り決めを拡大しないことには同意した。だが、すでに受領した記録を返却したり廃棄したりすることには同意していなかった。

受付係が扉の鍵を開けて間もなく、レイチェルが到着した。前夜は食堂で出会った女を通じて確保した部屋で過ごしていた。彼女が最初に尋ねたのは受領確認書のことだった。

ミンは、写しはまだ協会が保管しているが、政府が再び照会を行うと考える理由があると告げた。

「持ち帰った方がいいのでしょうか？」

「いいえ。私たちは受領しました。誰かがそれについて質問することにしたからといって、その事実が変わるわけではありません」

レイチェルは机の上に書類の束を置いた。残りの資料も持ってきていた。ミンは委員長によって課された制限について説明した。

「今日はこれらすべての責任を引き受けることはできません。ただ、ほかの誰かが引き受けるために何が必要か、一緒に確認できます」

二人は研究内容の説明から始めた。レイチェルは実験資料とロイの診察によって得られた情報の違いを説明した。また、以前の試験についての二つの記録の間に不一致があることを研究者たちが発見したと説明した。

「あなたが私に尋ねている男性に関係することですか？」ミンが言った。

「分かりません。承認されたどの実験にも属していないと思われる試料がありました。エイドリアンはその出所を明らかにしようとしていました」

ミンは、患者を特定せずにその不一致を文書化できるか尋ねた。

レイチェルは書類の束を調べた。目録作成時に記録された識別番号を列挙したページを見つけた。別の文書にある改訂済みの記載を参照していたが、その別の文書のページは写しの中になかった。

彼女は目録の用紙を受領確認書の横に置いた。

「もう一方のページがない状態でこれを見ると、誰かが誤りを訂正したという意味かもしれません。別の意味かもしれない」

法律顧問は用紙を注意深く読んだ。これを作成した人物の名前を尋ねた。レイチェルは分からないと答えた。写しを取った研究者は、改訂を担当した職員と話すことができなかったのだ。

ミンは用紙を返した。

「もう一方の記録が手に入るまでは、特定の行為の証拠だと説明しない方がよいと思います」

それは、レイチェルがほかの研究者に与えたであろう助言だった。今それを聞き、自分自身の切迫した状況によって、発見したことの評価がいかに容易に左右され得るかを理解した。

彼女は目録を書類の束に戻した。

帰る前に、レイチェルは自分宛ての伝言を預けられる住所があるか法律顧問に尋ねた。連絡を待っている人が、二人の普段の通信手段を使えないかもしれないと説明した。ミンは協会の公開連絡先を提示した。そこに送られる通信の秘密を保証することはできず、医療資料や他人を危険にさらす可能性のある情報には使用しないよう求めた。

レイチェルは住所を書き留めた。それをロイに伝える手段がなかった。

取り決めがあることすらまだ知り得ない相手との間に、取り決めを設けたというのは奇妙な感覚だった。

扉のところで、受付係が受領確認書の二つ目の写しを手渡した。一つ目は、前夜に何度も広げた跡が見え始めていた。

05 — 修理屋の通り

職員たちが修理店にやって来たのは、九時を少し過ぎた頃だった。店主は空気を入れ替えるために扉を開けていた。正午までに引き取りに来ると持ち主が約束したポンプを修理していた。

最初の職員が、店主以外にこの建物に住んでいる者がいるか尋ねた。いないと答えた。彼女は、ほかの人を泊めることができる部屋が建物内にあるか尋ねた。

「以前は息子がここに住んでいました」

「今はいないのですか？」

「南部にいます」

その部屋を営業目的の宿泊施設として使っているかと尋ねた。店主は使っていないと答えた。職員は回答を入力し、礼を言った。同行の職員は、家庭用電化製品の修理を宣伝する看板を確かめるまで、扉のそばに残っていた。

次の店でも、彼らは同じ質問を始めた。

別の訪問者が現れたのは、それから一時間近く経った頃だった。市の職員たちが使っていた端末は持っていなかった。通りの端にある事務所で働く誰かが着ていてもおかしくない服の上に、暗い色のコートを着ていた。

彼女は店主に写真を見せ、この男を見たことがあるか尋ねた。

店主には見覚えのある写真だった。交差点の公共スクリーンで何度か見ていた。ここ二日間、人々に見せているのと同じ写真だと答えた。

「ご本人を見たことはありますか？」彼女は尋ねた。

店主は女を見た。「警察の方ですか？」

彼女は確保命令に関連した聞き取り調査を認める書類を示した。名前があるはずの場所に番号が記されていた。

「この方には医療的な援助が必要かもしれません」彼女は言った。

「それが必要なら、どうして捜しているのが医者じゃないんですか？」

M-06には、男に有用な情報を与えることなく、その問いに答える方法がいくつもあった。彼女は書類をしまった。この地区に派遣された理由は幾つかあった。この通りへ来るきっかけとなった報告は、給水所で負傷した男を目撃したというものだった。その男をロイ・バッティだと確実に特定できる情報は何もなかった。

客が一人、段ボール箱に入った扇風機を持ってきた。店主に挨拶をし、カウンターに置いた。待っている間に修理してもらえるか知りたがっていた。

M-06は二人が話せるように脇に寄った。待っている間、窓辺に並ぶ時計に目をやった。そのうちの一つの下には、値段を書いた紙が置いてあった。

医学的検査を受けた部屋にあった時計を思い出した。その音をひどく嫌がった職員が一人いて、時計を取り外したのだった。音が止まった瞬間のことは覚えていた。その男の顔は思い出せなかった。

店主は客との話を済ませ、再び彼女の方を向いた。

「まだ質問はあるんですか？」

「あるかもしれません。ほかの者が来る可能性もあります」

店を閉鎖するつもりなのかと、店主は尋ねた。そのような指示は受けていないと彼女は答えた。

彼女が帰ったあと、店主は奥の部屋へ行った。今朝ロイが使ったカップが、まだ流しのそばにあった。店主はそれを洗い、ほかのカップと一緒にタオルの上に伏せた。

外では、M-06が聞き取り調査の結果を入力していた。訪問の経緯、建物の用途、身元が確認できなかったことを記述した。店主が対象者を泊めたことを否定したかどうか記載するよう、メッセージが届いた。

彼女はそれを二度読んだ。店主にはその質問をしていなかった。

彼女は代わりに、そう回答した。

06 — 不在の職員

十一時までに、病院では研究が中断された際に閉鎖された部屋のうち、二室が再び使えるようになっていた。イマニ医師は朝の大半を、どの通常の診断手順がそこで実施できるようになったかの確認に費やした。すべての業務を再開することはまだできなかった。

エイドリアンは返却された文書を調べていた。そのうちの一つが付録と切り離されていることに気づいた。その文書には予備試験で検査した資料についての記述があったが、付録がなければ、観察結果のすべてを個々の試料と対応づけることはできなかった。

彼は欠落したページの返却を求めた。病院の記録管理室は、付録が査察を担当する機関に移管されたと伝えた。

「いつ移管されたのですか？」

職員は処理記録を調べた。試験が中断されたあと、ファイルから取り除かれていた。受領側の承認書に該当する研究の分類が含まれていたため、システムは移管を受け付けていた。

エイドリアンは承認書を見せてほしいと頼んだ。職員は、承認書が受理された際に記録された参照番号なら示すことができると言った。文書そのものを取り出すことはできなかった。

彼は参照番号の一部に見覚えがあった。見知らぬ医療部門からの照会に記されていたのと同じ系列の識別子が含まれていた。改訂番号は異なっていた。

彼は参照番号と移管時刻を書き写した。それは、その部門と欠落した研究記録との間で、彼が初めて確認できた関係だった。何を意味しているのかは分からなかった。ある機関が、もともと別の機関が管理していた記録へのアクセスを認められたという可能性もあった。

彼がまだ参照番号を調べていると、イマニが事務室に来た。来訪者が一人、階下の部屋にいた患者の治療担当者と話したいと申し出たのだという。

「また医療連絡担当者ですか？」エイドリアンは尋ねた。

「何も言わなかったわ」

来訪者は廊下で待っていた。中断された研究に関する情報を取得する権限を与えられた者だと名乗った。その朝、普通のスーツを着て地域施設に到着した男だった。

イマニは、照会の目的と照会者の立場が明らかになるまでは、患者の状態について話すことはないと説明した。

来訪者は承認書を取り出した。

病院での研究についての記載はあったが、名前はなかった。イマニは裏返した。裏面には何もなかった。

「あなたは医師ですか？」彼女は尋ねた。

「いいえ」

「それなら、患者の評価をお伝えすべき相手ではありません」

男は、評価はすでに入手していると答えた。訪問の目的は、以前の患者が治療中に例外的な検査を受けたかどうかを確認することだという。

イマニは、例外的とはどういう意味か尋ねた。

「通常、この病院には持ち込まれない種類の資料の検査です」

エイドリアンは、中断された研究の一環として病院はいくつもの検査を行ったと説明した。個々の結果を開示できる条件は、前日に医療連絡担当者に説明していた。

来訪者は話を聞いていた。検査のために受領した資料の記録を管理する責任を負っていた職員の名前を尋ねた。

エイドリアンは、目録は数名によって作成され、そのうち何人かはその後、研究室への立入りを禁じられていると答えた。来訪者がどの記載について話をしたいのか、まず明らかにする必要があった。

男はそれ以上、名前を得ようとはしなかった。今後の連絡に使用する参照番号を渡し、立ち去った。

イマニは渡された参照番号を調べた。個人ではなく、機関を示す番号だった。聞き取りの際の対応について苦情を申し立てようとしても、誰に関する苦情なのか特定できなかっただろう。

来訪者が帰ったあと、エイドリアンは記録管理室に戻った。職員は欠落した付録が最後に修正された日付を見つけることができたが、修正を担当した職員の名前は、部門名に置き換えられていた。

公開名簿からすでに消えていた、あの部門だった。

07 — ホームの端にいる男

午後も半ばを過ぎる頃、ロイは旧路面電車地区の端にたどり着いた。そこには、かつて川沿いの工業施設へ向かう電車が発着していた屋根付きのホームがあった。運行は何年も前に廃止されていた。屋根は残っており、その下の何か所かに人々が自分で持ち込んだベンチが置かれていた。

彼はベンチの端に腰掛け、店主からもらったパンを食べた。レイチェルと待ち合わせを決めた地区へ、そのまま向かうつもりだった。ただそうしようと決めるだけでは、自分にできることに限界があると認識し始めていた。

右手を握ることが難しくなっていた。午前中、脚の状態は肩ほど変化しなかったが、一歩ごとに足を置く位置を意識せずに長く歩くことは、もうできなかった。

イマニはこの変化に驚くだろうかと考えた。おそらく驚かないだろうと思った。

男が一人、二つのプラスチック製の箱をホームに運んできて、工具を並べ始めた。そばには自転車があった。しばらく後輪を調べたあと、何かを取りに通りの向かいの建物へ行った。

ロイは置き去りにされた自転車の車輪がゆっくり回るのを見ていた。屋根の反対側の端に、暗い色のコートを折り畳んで腕に掛けた女が立っていた。彼女は通りの方を見ていた。振り向いたとき、自分を見ていることにロイは気づいた。

これまでどこかで彼女を見た記憶はなかった。しかし、じっと立っているその様子には、病院で遭遇した男を思い起こさせる何かがあった。

彼女はロイに向かって歩き始めた。

ロイは紙袋を自分の横に置いた。立ち上がれば肩の状態を悟られずには済まなかった。立とうとはしないことに決めた。

女は、声を張り上げずに話ができる距離で立ち止まった。コートは先ほどまでの雨に濡れていた。

「バッティさん？」

彼は彼女を見た。「誰だ？」

「私について何か聞かされているなら、番号を知らされているはずです」

「番号は聞いていない」

「M-06です」

彼はまた通りを見た。二人の人間がホームの入口の前を歩いていた。どちらもベンチの方を見なかった。

「もう一人はどうなった？」彼は尋ねた。

「生きています。市内で任務に就いています」

ロイはしばらく黙っていた。病院で命令を出していた者たちの顔よりも、その男の顔をよく覚えていた。

女は治療が必要かと尋ねた。ロイは必要だと答えた。

「診察を受けられるよう手配できます」

「どこで？」

彼女は地域施設の名前を告げた。ロイは、診察が終われば自由にそこを出られるのかと尋ねた。

M-06はすぐには答えなかった。

「それは保証できません」

「なら、治療の申し出とは言えない」

彼女は彼の手を見た。わずかに動かすにも、力を要しているようだった。地域施設で診察を受けた者の大半であれば同程度の回復は不可能なほど重い傷から、対象は回復したのだと聞かされていた。イマニの所見も読んでいた。

しかし、どちらの文書も、ベンチに座っている男と向き合うための準備にはならなかった。

「痛み止めは何か飲みましたか？」彼女は尋ねた。

「病院を出てからは何も」

「手がどうなっているか分かりますか？」

「いや」

自転車を置いていった男が、もう一人の男を連れて戻ってきた。足りない部品について話していた。二人は箱のそばで立ち止まり、中を探し始めた。

M-06は二人の男を見た。彼女が受けた承認では、身元を確認した時点で対象の確保に着手できることになっていた。ほかの人々がその場にいる場合については別の規定が設けられており、その意味について地域施設の将校と話していた。具体的な遭遇時の状況に応じて、どう適用するかを決める必要があると将校は言っていた。

「この人たちに怪我をしてほしくありません」彼女は言った。

「俺もだ」

ロイは、彼女が屋根の向こうの端に目を向けるのを見た。ほかの人員の到着を待っているのかどうかは分からなかった。ベンチから紙袋を取り、立ち上がった。思ったよりも時間がかかった。

M-06が彼に向かって一歩踏み出した。ロイは彼女に向き直った。

一瞬、彼女は先ほどの申し出を繰り返そうとしているように見えた。だが、代わりに彼の肩を見て、もう一つ質問した。

「施設に連れていかずに治療を手配できるなら、受けてくれますか？」

「ああ」

彼が自由を何一つ失うことなく答えられる質問を、彼女がしたのはそれが初めてだった。

路面電車の保守車両が通りの端に現れた。自転車の修理をしていた男が足りない部品を探しに行った建物のそばに停まった。ホームにいた男の一人が運転手に声をかけた。

M-06は屋根の側方へ移動した。ベンチから通りまでの間をロイが歩いていくのを見ていた。ポケットから無線機を取り出したときにも、彼の姿はまだ見えていた。

彼女は、対峙の末に対象を見失ったとは報告しなかった。そのような報告に記されるべき対峙は起きていなかった。

対象には診察が必要であり、居合わせた人々を危険にさらさずに確保できる条件が整っていないと告げた。さらなる指示を求めた。

回答が届く頃には、ホームの端のベンチに誰もいなくなっていた。

08 — 報告書にない名前

デレン大尉が遭遇の報告を受け取ったのは午後四時だった。ロイ・バッティが姿を消して以来、作戦に割り当てられた人員の一人によって確認された、初めての直接的な目撃情報だった。

彼は報告書を読み、対象がどこへ連行されたか尋ねた。

中尉は、対象は確保されていないと告げた。

デレンは、報告書を提出した女と話したいと言った。中尉は要請を入力したが、彼女は協議に応じられないとの回答を受け取った。彼女の指示を受領した将校宛てに別の照会を行うと、地域施設への帰還を命じられたという情報が得られた。

数分後、ヴェイルが来た。遭遇に関する今後の報告はすべて、司令部に配布する前に統合参謀部へ回すことを求めた。

「ようやく彼の状態についての記録が得られた」デレンは言った。

「確保に失敗したという報告が得られたのだ」

「それは同じことではない」

ヴェイルは報告書を読んだ。診察の必要性について記録された箇所で目を止めた。そこには対象による攻撃的な行動を示す証拠がなかった。

彼は、遭遇中に技術的な原因で通信が中断されたことはあったかと尋ねた。

「記録によれば、ありません」

ヴェイルは書類を返した。関係した人員の行動の評価は、派遣元の部門が行うと言った。その評価が完了するまで、司令部は以前に配布された対象に関する情報に基づいて行動することになった。

デレンは、その朝M-06に渡したイマニの所見を見た。彼の手元の説明資料の写しにも、まだ添付されていた。

地域施設では、M-06が報告内容の説明を求められていた。将校が一人、対象の確保を物理的に妨げられたのかと尋ねた。

「いいえ」

「対象はホームにいた人々を脅したか？」

「いいえ」

「君を脅したか？」

「いいえ」

将校は待った。確保に失敗した場合に記録するための分類をいくつも与えられていたが、今聞いている回答に当てはまるものはないようだった。

「それなら、なぜ立ち去らせた？」

彼女は遭遇時の状況と、与えられていた医療情報について説明した。将校は、対象を施設に連れてきたあとに診察を行うこともできたと指摘した。

「ここへ連れてくる前に診察を行えるか尋ねました。まだ回答を受け取っていません」

将校は面談を打ち切った。さらなる指示を受けるまで、建物内に留まるよう命じた。

M-06は廊下に腰掛けた。そこにはほかに三人が待っていた。一人は翌日の装備を受け取りに来たM-04だった。彼は閉じられた扉を見て、対象に会いに行ったのかと尋ねた。

彼女は、そうだと答えた。

「どんな状態だった？」

「彼らが思っているほど良くはない」

M-04はうなずいた。二人の間で今交わされた言葉を記す欄は、任務記録にはなかった。

街の反対側では、レイチェルが紙片に協会の電話番号を書き、鞄の中の書類の束のそばに入れた。ロイとの待ち合わせ場所へ、もう一度行こうとした。最寄りの道路は査察のため閉鎖されており、いつ再開されるのか分かるほど近くに留まることもできなかった。

その午後、誰かがロイと話したことを彼女は知らなかった。治療を申し出た者がいたことも、その人物がロイの自由を保証できなかったことも知らなかった。

ロイは古い路面電車のホームから少し離れた、ある建物の庇の下に座っていた。左手を使って右手を開き、指の震えが止まるまで待った。彼と話した女は、彼を確保するために派遣されていた。次に派遣される者も同じ質問をするだろうと考える理由はなかった。

修理店の奥の部屋と、今朝店主が渡してくれたカップを思い出した。あそこに戻ることはできないだろう。

再び雨が降り始めた。彼は庇の下の、もう少し奥へ移動した。

司令部では、彼の前に立った女が報告書の中で四文字の識別番号で記されていた。デレンはその朝、彼女と会っていた。言葉を交わし、文書を手渡し、彼女がコートを腕に掛けて部屋を出ていくのを見ていた。

彼は、彼女の名前を知らないことに気づいた。

第03章 終。